

日本労働年鑑 1951年版(第23集)

The Labour Year Book of Japan 1951

第一部 労働者状態

第四編 賃金と労働条件

第四章 労働衛生

第一節 罹患率

戦時および戦後を通じて、生活条件が極度に低下したため、日本の労働者は、慢性的な疲労状態の下におかれている。たとえば日映演労組、京都、多摩川撮影所分会の調査によれば、就業中に疲れないといっているのは全労働者の二七%にすぎない(一九四九年七月現在)。

| | |
|----------|-------------|
| 疲れない | 四四人(二七・三%) |
| 疲れる | 一〇六人(六五・八%) |
| 疲れるときもある | 一人(六・九%) |
| 合計 | 一六一人(一〇〇%) |

しかも、労働の強度はますます強められているので、病人は増加傾向を示している。日立製作所多賀工場三、四〇〇人の健康診断において、結核による要注意者は、一九四八年一月には一四名、一九四九年五月には一七名、一九四九年一月には一〇五名となっており、要注意者は一年間に七・五倍の増加をみている。一九五〇年一月には、結核による長欠者のみで一〇四名に達した。

労働省労働基準局が、常時一〇〇人以上の労働者を雇っている事業場のうち、一、九三一事業場をえらび、一九四八年中におこなわれた健康診断の結果について調査をおこなったが、その集計結果による産業別、病類別などの一〇、〇〇〇人当り罹患率は、第97、101表のとおりである。

第97表によれば、罹患率は男二三・五%女二二・六%となっており、とくに結核が男二・六%、女二・〇%を示していることは注目される。なお、寄生虫病、歯牙の疾患をはじめトラホームなどが高率であることは、わが国の労働者の生活水準の低いことを物語っている。

つぎに規模別にこれをみれば第98表のとおりであるが、とくに結核のみについて集計した第99表によれば、規模の小さい工場ほど、病気をおして働いている労働者の多いことが明かである。

また、罹患率を産業別にみれば第100表のとおりである。もつとも高率なのは印刷業の三八・六%であり、鉱業と窯業および土石工業がこれについでいる(いずれも三〇%以上)。男女別の内訳によると、男の場合は第三位が窯業および土石工業の代りに機械器具工業の二九・六%となつている。女の場合は鉱業が比較的low率で(坑内作業が禁止されているため)その代りに運輸通信業が第三位三七・七%である。

さらに、結後の罹患率のみについてみれば第101表のとおりである。

■ ←前のページ 日本労働年鑑 1951年版(第23集)【目次】 次のページ→ ■
日本労働年鑑【総合案内】

法政大学大原社会問題研究所(<http://oisr.org>)
